
うっかりもののおじいさん

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うっかりもののおじいさん

【コード】

N3714M

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

よろしくお願いします。

だらけている男が目の前で墜落してしまった。死ねばいい。そう願ったばかりに男は落っこちてしまったのである。可哀想な話だが、死ぬに値する程度の低い男だったから、どうでもいい。死んでくれ結構。なんて、ひどいことを頭に浮かべながら、男が消えて行くのをその目で見ていた。憐れな男であるが、可哀想としか言いようが無いのである。酷い話だが、そういうものだ。人生というのは、男というのは、女というのは、非常に憐れなものであるからして、さっさと死ぬのを私はお勧めしたいのだが、どういうことだか世間は今日も稼働している。まったくもって不思議な話だよなあ、なんて頭をかしげて糞尿を流している彼らを見ながら私は、今日もしゆしゅっと出勤。会社にしゃしゃつとレッツゴー、なんてはしゃいでいたのが悪かった、足を滑らせてホームに転落、気が付く間も無いうちに困窮のうちに死んだ。私の葬儀を私は俯瞰的な位置づけで眺めながら、どんどんお空に吸い込まれて行って、気が付くとどっかに浮遊、今まで私が生きてきたこの男女やら動物やら植物やらのわけのわからない世界を俯瞰して泳いでいたのである。そうやってみると、なんだ、こんな世界本当に陳腐でチンケだよな、なんてくだらなく呆れるような思いが脳味噌を通り過ぎて消えていき、あなんてこつた。なんて呻いているところに、天使の輪を付けたじいさんが現れて俺に言う。

「君、生きたい？」

なんて俺に尋ねた後にじいさんはニンマリと笑って真っ白な歯をみせつけてきた。息がくさかった。

「まあ、ぼちぼちですかね」

なんて答えると同じいさんは何が不満なのだろうか、恐ろしい形相に変わり「きさまあ」などと脅しつけてきた。拳を作ってわなわな

させたりもしていたので、気持ち悪いし怖かった。「訂正します、訂正します。それなりに生きてみたいです」と言い直すと拳をわなわなさせるのを止めて、「ならいいんだけどね。じゃあ、君のこと蘇らすから」などと淡々と述べるのであった。

「そんな簡単に蘇っちゃうていいんですか」

私は俯瞰的な感じで眺めていた自分の葬儀を再び見下ろした。棺桶に私の遺体。それが蘇るというのはすさまじいサプライズじゃないだろうか、みんな驚くだろうなあ。なんて希望が湧き上がってきて、微笑みが抑え切れなくなってきた私に、じいさん。

「じゃあ、よみがえらせるから……ちちん、ぷいぷい！」

「う、うわああ」

視界がぐにやぐにやと曲がり、足元から凄まじい力で引つ張られる。私は排水管を通り抜けるネズミであるがごとく狭ッ苦しい思いをしながら天空を降下。じいさんが手を振る姿が遠くなっていく。そして暗闇。

「……生き返ったのか」

葬儀場では慎んで葬儀が行われているらしいが、私の意識は棺桶の真っ暗闇の中で覚醒した。

「……不思議な感じだが、まあ、いっちょみんなを驚かしてやるうじやまいか」

なんて言ってから、意気込んで手探りで蓋を開けようとする。蓋に手で触れてから、みんなを驚かすために深呼吸。なんて言おうかはもう考えている、「俺は生きているぞー！」これに決まりである。簡潔極まりないがそれが故に良い。かなり現在の状況を示すに的を得ている一言だと思う。

さて決意したことだし、そろそろ行こうかな、なんて思って蓋を押し込む。鍵が付いているかと思っただが、蓋は押すと開いた。

挿し込まれる光。蛍光灯の光。現実の光。

私は棺桶から勢いよく身を持ち上げ、叫び上げた。

「俺は、生きて……」

「きゃー！」

「嫌あー！」

「うわあああ」

「助けてええ」

「何どうなつてんだ」

私が叫び終えるよりも早く、圧倒的に素早く、葬儀の黒ずくめの皆が怒涛の咆哮。私のサプライズ願望などは一瞬にして打ち砕かれ、みんなかなりの焦り顔で葬儀場から一目散で逃げ去っていった。

「……いくらなんでも、びびりすぎだろう」

取り残された私は、かなり寂しいイントネーションで呟いた。もう誰もいない。

「南無阿弥陀仏…南無阿弥陀仏…」

かと思いきや、一人、お坊さんが私の目の前で必死のお経である。私は呆れた。

「お坊さん。よく見てくださいよ。ほら、この通り足も付いているんだから、俺は紛れも無く人間だよ。まったく、お坊さん、お経なんて唱えてるんじゃない……」

しかしお坊さんは、すく、と立ち上がると私に向かって目をグワツと見開いて叫んだ。

「こ、この化け物めえ！成敗」

何故お坊さんたる人物がそれを持っているというのだろうか、懐より黒光りする拳銃。

「お坊さん、とち狂ったか……」

…パン！…パン！…パン！

天界にて葬儀場を眺めていたじいさん。

「ありやありや」

などと言いながら頭を抱えている。そして苦笑した。

「うーん。わしもすっかりボケてしまったようだ。身体という入れ物に魂を注入することは欠かさず行っただが、肝心の肉体の再生を忘れておった。まったく、わしもそろそろ引退せねばダメなのかなあ。これから先、どうしよう……」

じいさんは腕を組み抱えながら天界を歩いた。

悲しそうな表情である。

そんなじいさんの目の前に、先ほど銃殺されたばかりの男が、再び地上より浮かび上がってきた。

「じいさん、なんとたつて二度も死ななくちゃならねえんだ。銃で殺されるのがあんなに痛いものだとは知らなかったぜ」

男はじいさんをするどく睨み付ける。じいさんはおどおどしてから、真つ白な歯を男に見せた。

「もう一回、よみがえる？」

男は笑った。

「もう御免だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3714m/>

うっかりもののおじいさん

2010年10月8日14時27分発行